

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
きー3	枳実薤白桂枝湯 人参湯	枳実 (苦寒) 2.8g・厚朴 (苦温) 4g・薤白 (辛温) 8g・桂枝 (辛温) 1g・栝楼实 (苦寒) 5g 上の5味を水 200ml を以てまず枳実・厚朴を煮て 80ml を取り、滓を去って諸薬を内れて煮ること数沸し滓を去って三回に分ちて温服す。
胸痺心痛短気病脈証併治第九第5条 (金匱要略)		
「胸痺心中痞 ^{りゅうき} 留 ^あ 気結 ^{ぎやくそう} ぼれて胸に在り胸満脇下心を逆 ^{つかさど} 槍するは枳実薤白桂枝湯之を主 ^{つかさど} どる。人参湯も亦之を主 ^{つかさど} どる。」		
解説 胸痺の病で、心中に痞えた様な感じがあり、何か胸中に陽気が留まっていて散らず、従って胸中に一杯詰まっている様で、締め付けられる様に苦しい、そして脇腹から胸中にかけて、突き上げられる様な痛みのする者 (心を逆槍するとは、左から右側の肩にかけて突き上げることをいう) に枳実薤白桂枝湯が主治する。人参湯もまた主治する。		
胸痺の病で、胸中の気血の上昇、下降が阻害されて心中が痞えた様な感じがあり、胸中に気血が留まっていて散らず、また肺に濁痰があるために胸中に一杯詰まっている様で締め付けられる様に苦しく、そして中焦 (脾胃) は熱を持っており、この陽気 (熱) が滲漏して、肝にも充満し、心を衝き上げるために、脇腹から胸中にかけて突き上げられる様な痛みを覚える者は枳実薤白桂枝湯が主治する。この場合の胸痺は殊に夜間に激しい病状を起こすものが多い。胸痺に類似したもので、中焦 (脾胃) の裏寒による胃痛があり、これが原因して厥心痛となったものには人参湯が主治する。		
「心中が痞す」とは、胸中で気血の上昇、下降が阻害されることで、これを留気と称している。		
「胸満」は、肺に濁痰があることを言っている。		
「脇下より心を逆槍する」とは、中焦 (脾胃) に熱を持ち、この陽気 (熱) が滲漏し肝に充満して心を衝き上げることを言っている。		
枳実薤白桂枝湯は、心臓病や喘息などで、胸苦しく、心下から胸の中央や咽喉まで詰まる感じのする時、また肩まで突き上げる様な痛みを覚える時に用いる。		
枳実薤白桂枝湯の栝楼実 ^{つかさど} は肺の濁痰を去り、枳実・厚朴 ^あ で脾胃の陽気が滲漏するのを復帰せしめて、肺・肝の満を去り、桂枝・薤白 ^{りゅうき} は心陽を助けて気血の循環をよくする。		
枳実薤白桂枝湯証		
新古方薬囊によれば「胸痺の病で心中に痞へたる様な感があり、何か胸中にいっぱい詰まっている様で締め付ける様に苦しく、時に脇腹から胸中へ突き上げられる様な痛みのある者、本方の証も殊に夜間に劇しき病状を起こすもの多し。」と記されている。		
人参湯証		
新古方薬囊によれば「裏に寒があつて胸中が痞える者、胸中に痛みのある者、唾多く出でて止まらない者、腹中痛んで手足冷え下痢し易き者、胃中塞がりたる感ありてムカムカし易い者に用いる。」とある。		
参考 枳実薤白桂枝湯は、中焦に熱を持って胸痺の病を起こして、殊に夜間に激しい病状を起こすものが多い。人参湯は中焦の裏寒によって、胸痺の病を起こしている。		
厥心痛は、寒厥心痛と、熱厥心痛とがある。		
寒厥心痛 (冷心痛) は、心痛が突然に起こり、その痛みが背にまで及ぶ、或いは痛みが綿々として続く、更に手足厥冷、冷や汗出で、小便清利し、或いは大便利して、渴せず、気力衰えて脈も沈、細にして無力となる。陽を扶け、寒を散ずる理中丸 (人参湯) を用いる。		
熱厥心痛 (熱心痛) は、暑毒が心に入り、或いは常に熱薬を服したり、熱食をすることにより、熱が鬱して痛みをなすもので、症状は、胃心下部が灼熱劇痛し、熱いものをいやがり、冷たいものを喜び、痛みに休作あり、或いは面目赤黄、身熱煩躁、掌中熱、大便硬を伴う。解鬱泄熱の承気湯類を用いる。		